慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢諭吉関係新資料福沢諭吉書簡
Sub Title	New materials : letters from Fukuzawa Yukichi
Author	福沢研究センター(Fukuzawa kenkyu senta)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2017
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.34, (2017.) ,p.337- 348
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20170000-0337

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉関係新資料　福沢諭吉書簡

福沢研究センター

『福沢諭吉書簡集』（岩波書店　平成十三年～十五年　以下『書簡集』と略す）未掲載で、『近代日本研究』第三十三巻刊行以降見出された書簡を載録する。掲載は発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』の形式に従った。詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。なお、書簡番号は『書簡集』から『近代日本研究』第三十三巻まで通番で付された番号を追うものである。

凡例

一、常用漢字は、原則として現在使用されている字体を用いたが、慶應義塾など若干の固有名詞に、原文の字体を残した。

二、異体字、俗字、或いは書き誤りかと思われる文字は、正体に直した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただし、ひら仮名・かた仮名の判別がつかない場合は、か

た仮名で表記した。

四、変体仮名はひら仮名に改めた。ただし、書簡において助詞として用いられている「は」「て」「え」は、原文の字形を残し、小活字右寄せで「ゑ」「ゐ」「に」のように印刷した。原文が確認できない場合も、漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。

五、濁点・半濁点は原文のままとした。

六、合字は、使用頻度の高い〆（より）、〆（しめ）は原文の字形を残した。頻度の低い𠮷はトキ、𠮷はトモ、𠮷はことと表記した。

七、句読点は、編者の判断により適宜補った。

八、執筆年月日や発信年月日などを推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。

九、脱落と思われる文字は、〔　〕を付して補った。

十、書簡については、本文の後に【　】を付して書簡の大意を示した。また封筒に関する事項は、書簡の理解に必要と判断されるもののみに限った。

十一、特に所蔵が記載されていないものは、福沢研究センターの所蔵である。

二六四〇　和久正辰

明治十三年九月八日

八月廿六日之貴翰拝見、時下残暑尚強、益御清安奉拝賀。此節師範及中学両校御引受之由、御多忙奉察。併何れも次第ニ盛大之由、尚此上之御勉強専一之御事、乍蔭奉祈候。過日ハ由利君にも御逢、岩井氏其外御同席ニ

有之よし、同君之為ニも東道ノ主人深被悦事ト存候。右拝答旁申述度、不相替多事ろくニ執筆之暇も無之、略文早〻御海容被下候。頓首。

九月八日　　福沢諭吉

和久正辰殿　梧下

尚以、時下御自重専一奉存候。乍憚岩井氏其外諸知に、可然御致意奉頼候。以上。

【宮城師範学校および仙台中学校両校の兼務を励まし、また岩井諦他同席での由利（公正カ）との面会について、由利も喜んだであろうと述べる】

［封筒表］　宮城県仙台　南光院町八番地　和久正辰　殿拝

○和久正辰は、伊予松山の出身。明治二（一八六九）年四月二〇日に、十八歳で入塾した。入塾時に「入社姓名録」に記入された名前は和久喜佐雄で、のちに改名した（『慶應義塾入社帳』復刻版、慶應義塾、一九八三年。I二五九頁）。明治五年六月ごろまで在籍し、二十三年特選塾員となる。宮城師範学校や仙台中学校のほか、のちには東京美術学校の講師や、奈良県や青森県で中学校長を務めた。○『慶應義塾百年史』付録（慶應義塾、一九六九年、一六九頁）によれば、和久は十二年に宮城師範学校長、翌十三年に仙台中学校長となっており、この書簡の文面から考えると、両校を兼務したということであろう。○「由利君」は由利公正か。由利公正は十三年一月の福澤諭吉らによる交詢社設立に協力し、また次男石松は十一年に童子科から、三男真男は十三年に幼稚舎から慶應義塾で学んでいる。長男三岡丈夫は、十六年十一月に福沢の次姉中上川婉の四女くに（国、中上川彦次郎妹）と結婚した。○「岩井氏」は岩井諦。和久と同じ紀州の出身で、嘉永二（一八四九）年生まれ。明治七年九月に入塾し、十年卒業。十三年一月九日付の松倉恂宛福沢諭吉書簡には「宮城日報記者」となっているが（『書簡集』第二巻三〇二頁）、実際には陸羽日日新聞社印刷長に就任した。○三沢画廊所蔵。

二六四　黒田清隆　明治十四年六月七日

其後御打絶御無音仕候。時下暑気を催し候処、益御清安奉拝賀。陳ハ此生ハ蜂谷昌勝ト申旧唐津藩士、先年弊塾寄宿、原書も読ミ翻訳等も出来候者なり。此者兼ゟ北海道之事ニ志を起して、開墾等之方法ニ付色ゝ工夫を運らし、或ハ有志者ニ談し、或ハ華族ニ説き抔いたし候得共、未タ其志ヲ伸るを得ず。就ゟハ何ハ扨置其実地を一見して尽力いたし度とハ申ながら、是亦其方便を得すして、既ニ壱ケ年余も空しく消日いたし候事ニ御座候。右之次第ニ付若しも其御手筋ニ相応之御用抔ハ有之間敷哉。実ハ札幌□□□〔虫損〕根室之辺ニ就ゟ何か事情を探索いたし度、志願本人之目的ハ結局私立之社ニゟ官之保護を蒙り、事を成すニ在れ共、さし向其着手之方便ニ困却いたし候段ニ付、何か其辺之事に教示を蒙るを得バ、誠ニ難有仕合ニ御座候。御用繁之処恐縮之至候得共、御都合宜布節、暫時ニゟも御逢被下、其所申御聞取ニも相成候ハヽ、難有奉存候。右ハ蜂谷昌勝之依頼ニ任セ添書一筆、如此御座候。早ゝ頓首。

六月七日　　福沢諭吉

黒田先生　侍史

【北海道根室周辺の開墾等への従事を希望する門下生蜂谷昌勝を紹介し、面談を依頼する】

○「黒田先生」は黒田清隆。これまで黒田宛の書簡は、明治十二（一八七九）年四月四日に発信した、慶應義塾維持資金を政府から借用する件に助力を依頼した一通のみが知られていた（『書簡集』第二巻一九七～一九八頁）。西南戦争やその後の

インフレーション、徴兵免除の見直しなどを受けて、慶應義塾の経営が厳しくなったため、福沢は政府から資金借用を目論み、伊藤博文を始めとする関係者に交渉していた。黒田もそのひとりで、同書簡には「拝趨久〻にて得寛話」とあるので、以前から懇意であったことがわかる。黒田については、鹿児島英学校に赴任した鎌田栄吉、市来七之助、藤野近昌に宛てて十四年九月十九日に発信した書簡では、開拓使払い下げ問題に言及して、必ずしも黒田と五代友厚を咎めるには及ばず、十三年間の政府全体を咎めるべきで、鹿児島人が傍若無人だからと言って、名のある鹿児島人をみな同じに見做すのは「少〻気之毒」と記している（『書簡集』第三巻一三二～一三五頁）。また同年十月一日付大隈重信宛書簡では、十四年政変を三菱と五代が利を争い、大隈と黒田が権を争う「一場之私闘」にすぎないという「作説」の流布は「或る人〻之口実ニも可相成模様」と述べている（『書簡集』第三巻一三九～一四〇頁）。一方明治二十年の条約改正問題をめぐっては、「先登将軍槍玉揚　棚牡丹餅落土方　可憐黒田蔭弁慶　一期之涙知断腸」（二十年七月二十七日付中上川彦次郎宛、『書簡集』第五巻二三九頁）と皮肉めいた漢詩も残している。ただその後も北海道のことについては黒田を引き合いにし、二十二年には株式購入を考える北海道炭礦鉄道会社の詳細を次男捨次郎に説明する際、「今度之鉄道ハ、黒田も知り大隈も賛成」と述べている（『書簡集』第六巻、一五八～一五九頁）。○蜂谷昌勝は、文中にもあるように旧唐津藩士で、十二年一月十二日に二十歳十か月で入塾し、成績表である「慶應義塾勤惰表」には十二年第二期（五～七月）まで「科外」に名前がある。蜂谷については、佐野常民に宛てた紹介状も存在している（『書簡集』第九巻一二一頁）。同書簡には「北海道抔へも来往、近日は水産の事に付何かを存立候義有之」とか書かれているので、この黒田宛の紹介状より後のものであろう。「交詢社姓名録」（『交詢雑誌』付録）によれば、明治十六年は水産会員、十七年から二十六年までは福岡県、佐賀県で中学校の教員をしている。○発信年は、おそらく黒田がまだ北海道長官を務め、蜂谷が北海道に職を求めて一年ほどたっていることから、明治十四年と考えられる。

三六四三　島津万次郎　明治二十六年一月十五日

改年之御慶目出度申納候。先以て益御機嫌能被成御超歳、珍重不斜奉存候。随而老生無異加年仕候条、乍憚御放念可被下候。いつも〳〵御無沙汰のみ不相済次第、毎度御音信被下候得共、逐一御返事も不仕恐縮之至、兎

角多事ニ懶怠ニ右之次第、あしからず御海容奉願候。一月ニなりても、八方より年始の来状堆くして山の如し。中津之旧友、旧ニ依て書を贈らるゝもの甚タ少なからず。一ゝ返詞と思へども何分其暇を得ず、乍憚御序之節前条之次第宜敷御披露、御詫之程奉願候。右延引ながら年頭之御祝詞旁申上度、匆ゝ如此御座候。頓首

二十六年一月十五日　　福沢諭吉

島津万次郎様

尚以時下厳寒御自重専一奉存候。呉ゝも諸友へ宜敷御致意奉願候。以上。

【無沙汰と年始の挨拶の遅れを詫び、中津旧共への伝声を依頼する】

［封筒表］豊前国中津諸町　島津万次郎殿　［封筒裏］封　東京三田　福沢諭吉

○島津万次郎は、安政三（一八五六）年、中津藩の重臣で用人等を務めた島津祐太郎（復生）の長男として生まれる。明治三（一八七〇）年八月慶應義塾に入学し、五年九月ごろまで在籍した。その後、四年十一月に旧藩主奥平家と士族間の互助組織からの拠出により開校した中津市学校の世話人を務め、また福沢諭吉も加入した、当初は士族授産を目的としていたと思われる鶴屋商社（明治二十一年から島津商会）の経営に携わった。三十一年一月五日歿。島津万次郎宛の書簡は十二通（ほかに封筒のみ残存しているものが二通）残っていた。本書簡は十三通目である。○「中津之旧友」について、『福翁自伝』は中津に対して批判的であるが、晩年まで交流のある者も「少なからず」あったことがわかる。○みぞえ画廊蔵

二六四三　中野松三郎　明治二十七年四月十三日

帰来後夜より一書を呈し度と存候中、何か多事ニ取紛れ今日ニ至まで怠慢之罪、御海容可被下候。扨過般其御地滞留中ハ不容易御約介罷成、加之御用繁之処、態ゝ遠方まで之御送迎、実ニ恐縮不堪次第、唯御礼申上候の

み。末貞君始め皆様へ逐一御礼之書状可差出之処、老懶何分ニも不能其義、乍憚御序之節宜敷御致意奉願候。右ハ乍延引御礼まて申上度、匆〻如此御座候。頓首。

二十七年四月十三日　　諭　吉

中野様　梧下

尚以、時下折角御自重専一奉存候。東京相替事ハ甚タ多し。何卒御閑暇もあらバ、折節御出掛奉待候。以上。

【中津滞在中の厚情に礼を述べ、上京を誘う】

○中野松三郎は旧中津藩士。明治十二（一八七九）年から二十年まで塾長を務めた浜野定四郎の甥にあたる。明治二年十月に慶應義塾に入塾。前述の中津市学校に教員として赴任し、のち世話人も務めた。第七十八国立銀行の発起人のひとりであり、長く支配人を務めた。前掲「交詢社姓名録」によれば明治三十三年まで支配人であった（但し、後述のように二十三年からは末貞友年も支配人と記載されている）。卒業生の名簿である『塾員名簿』によれば、明治四十四年から大正元年は中津銀行頭取、大正三年から五年には豊中製糸株式会社取締役。大分県会議員。西南戦争の際には、福沢が起草した西郷隆盛の処分に関する建白書に「中津士族同志総代」として名を連ね、猪飼麻次郎とともに京都の行在所に提出する役割を担った。○明治二十七年二月二十七日から三月十五日にかけて、福沢諭吉は父百助の墓参りのため、長男一太郎、次男捨次郎を伴って帰省した。下関からは門下生の日原昌造も加わり、中津では耶馬溪を訪れ、景勝地として知られる競秀峰のあたりが売りに出されていることを知って、購入者の心無い樹木伐採によって景観が変化してしまうことを心配し、その後一帯の土地を購入した。購入に関連する書簡も残されている。『書簡集』第七巻（こと）6耶馬溪競秀峰。○「末貞」は末貞友年のことであろう。旧中津藩士で、「交詢社員姓名録」によればこのとき第七十八国立銀行支配人。長く副支配人を務め、二十三年から支配人となった。○個人蔵

以下の書簡は、『書簡集』掲載時には原本との校訂ができず、やむなく『福沢諭吉全集』再版（岩波書店、九六九～一九七一年）から採録したが、このほど原本が判明し校訂作業を行うことができた。詳しい注についてはそれぞれ『書簡集』の各頁を参照されたい。

四六　井上従吾右衛門

慶応三年十月二十六日

昨日も早朝ゟ罷出御用多之処、御妨仕恐入候。扨其節内々御話申上候荷物之一条、今日も尚承候処、小野友五郎義明後廿八日京師へ出立も可致哉之由、若し同人出立いたし候ゑも、留主中事之理非曲直ハ姑ク舎キ、何事も留主ニゑ不相分と申場合相成、到底落着致間敷哉、甚心配仕候間、如何ニも御手数之段恐入候得共、是非共同人在府中ニ否之義相分候様仕度、若し又亜行中私ニ罪状も有之候ハヽ、甘して其罪ニ伏し可申、荷物ニ罪も有之間敷、罪之有無ニ拘らず、一応之挨拶も不致、他人所有之品を取押候義、士官たる者之可致処置ニ無之、旁以て昨今之中、友五郎出立不致前ニ黒白相弁し候。

御屋形之御書籍ハ勿論、序を以て私日用之品物までも取返し申度候。何分ニも宜敷御周旋奉願候。此段為念申上置候。頓々首々。

十月廿六日

【『書簡集』第一巻七九～八〇頁】

［封筒表］井上従吾右衛門様　福澤諭吉　御内披

六四　石坂専之介

明治十四年十一月二十三日

其後ハ打絶御疎闊、三、五日前須田辰次郎之一行帰京、久〻ニ而近況を詳ニせり。爾来益後清寧之由、実ハ前年之御病症、御帰郷之後も如何哉ト御案し申居り、一昨年小泉信吉御巡幸御供之節御目ニ掛候旨承り、先〻御全快ト存居候上ニ、又〻此度ハ須田之便、弥以て大丈夫なる御容体、誠ニ喜欣ニ不堪候。実を申せハ数年前之御大病、迚も御全快ハと窃ニ期したる程之次第、畢竟十分之御養生ニ而唯今之御健康、感服之至ニ存候。

来春暄気之時節ニと或ハ御出京ニも可相成よし、悦而御待受申候。何卒久〻ニ而御目ニ掛り度、本塾も依旧相替事無之、近来ハ生徒之数も非常ニ増加、浜野門野其外数名不怪勉強、万事都合宜御安心可被下候。此段御全快之御歓旁申述度、早々一書を呈し候。拝具。

十一月廿三日夜　　諭吉

石坂賢契

尚以追〻寒気之時節相成、殊北地ハ雪深き由、幾重ニも御保養専一奉存候。以上。

【『書簡集』第三巻一六七～一六八頁】

［封筒表］加賀国江沢郡大聖寺　松ヶ根村十六番地　石坂専之助殿　親展

［封筒表］封　東京三田　福沢諭吉出ス

○個人蔵。○今回新たに封筒が判明した。

一三〇九　福沢桃介　明治二十一年七月十八日

前便申入候通、おふさ事も今度ハほんとふニ全快ニ及ひ、既ニ先達ゟ芝居ニも参り、又本月十五日ハ両国之川開き、堀越ゟ之案内ニゟ向両国ニ参り、夜ニ入帰宅候得共何之障りも無之、安心被致度、拙者ハ依旧至極全健ニ候得共、さりとて転ろばぬさきの杖と存し、当年も亦海水浴を思立、明十九日ゟ鎌倉へ参候積り。藤沢まで汽車ニゟ、夫れゟ人力車、凡そ二時半斗之道程なり。何れ子供も同道之積り、唯今支度最中なり。

ばんだい山之噴火、実ニ恐ろしき事なり。い才ハ新聞紙ニゟ承知被致度、右ニ付新報社ゟ昨日壱人場所へ差出候。唯今之評判ニゟ転覆之地六里四方、死亡人四百名、怪我人九百余名と申事なれ共、諸説紛〻孰か信偽不相分、尚後便ニ附候。右要用而已、早〻不一。

七月十八日　　諭吉

桃介　殿

【『書簡集』第六巻三七～三八頁】

一三一五　福沢桃介　明治二十一年八月十七日

日本ハ正ニ残暑之時節、当年ハ暑気殊ニ甚しく候得共、幸ニ流行病之沙汰ハ無之、留主宅も一同無事、安心被

致度候。先月下旬ゟ鎌倉へ参り、海水ニ浴し、本月十三日帰宅。先方滞留中ハ石井甲子五郎並ニ田端氏も参り、毎日子供等と遊戯、面白き事ニ有之候。

一太郎捨次郎も六月廿八日竜動出発、大陸へ向ひ旅行、更ニ竜動ニ帰り、夫より帰途ニ赴くよし。是れハ本人共ゟ申参たるニあらず、高橋義雄の来書中ニ有之候。

石井氏もいよ〳〵米国之商売ニ身を委ね勉強と決心、但し本年中ハ先ツ以て除〔徐〕〻ニ進むとの事なり。日本之書生も無銭ニ〻困り入候次第、貴様も其地滞在中ニ〻何か実地立身之工風を考へ、帰国之上ハ金を作ることニ心身を委ね度存候。後進生が身を起すの法ハ、遠大ニ志すよりも細小を忘れざる方専一なり。千円金を他年ニ得んと志して一円金を今日ニ浪費するハ文明男子之事ニあらず。今日之一円こそ、他年千円之基本なれハ、先ツ之を愛しむ可し。

石井之商売如何ハ拙者ハ深く知らず候得共、或ハ同氏ゟ文通も可有之、何ニ〻も不苦、独力独立之生計専一なり。其独立ニ至るまで之資ハ拙者ニ〻引受け、他人ニ腰を屈せしむることハ不致積り、何卒常ニ実際の事を忘れざる様、呉〻も所祈候。

右無事之一報如此候也。

八月十七日　　諭　吉

桃　介　殿

尚以新聞紙ニ記すへき事あらハ、其事柄ハ何ニ〻も不苦、時〻報知頼入候。

此前之郵船ニ〻貴様之手紙参らず、何卒手紙ハ一筆ニ〻宜し、必ス毎便ニ認め送るやう、是亦忘る可らざる事ニ候。以上。

【『書簡集』第六巻四五～四七頁】

一五三　益田英次

明治二十二、三年頃七月十八日

拝啓仕候。陳ハロイド氏より別紙申参候得共、書中ハウスと申其家ハ何れ之家ニ可有之哉。唯今女教師之住居候家ハ、当月末まで之約束ニ而明渡候筈なり。何か間違之様存候ニ付而も、毎ゝ清襟を煩はし恐入候得共、一応御取調奉願候。右願用而已申上度、早ゝ頓首。

七月十八日　　諭吉

益田様

尚以ミスシスフハルロットは、当月末唯今之家を明け候事ニ存候。右家ハ拙宅之都合、少し入用ニ付、兼而約束間違なき様御指示奉願候。以上。

【『書簡集』第六巻三二八～三二九頁】

○MARK WEBSTER 氏寄贈。同書簡は長く益田英次曽孫によって、英国内に保管されていた。

＊『近代日本研究』第三十三巻「福沢諭吉関係新資料紹介　Ⅰ福沢諭吉書簡」二六三九　船尾栄太郎宛書簡　追加事項

○本書簡は代筆である。

（西沢直子）